

1 学校の特徴

第一学院高等学校 高萩校（以下「本校」という。）は、その教育目標に「社会で活躍できる人づくり」を目指し、「1／1（いちぶんのいち）の教育」を教育理念に掲げている。

生徒をプラス思考に変える独自の意欲喚起教育「プラスサイクル指導」を基軸とし、独自のキャリア教育である「地域全体を“学校”と捉えた教育『コミュニティ共育』」の推進、アンガーマネジメントの手法を積極的に取り入れ、生徒個々の自他肯定感を高め、生徒一人ひとりの「『もっともっと自分を好きになる』自分づくり」をサポートし、今後の社会の変化を見据えた教育の改革に向けて、生徒の成長度の可視化を目的とした「デジタル自分未来史ファイル（通称：D-FILE）」【成長の軌跡を残すeポートフォリオと成長の実感を表す独自の「成長度マップ」】に取り組んでいる。

また、教科学習においては、「生徒の学習意欲の向上」と「（基礎）学力の定着」を目的に全生徒にタブレット端末を必須として、独自のICT教育を展開し、第一学院独自の個別最適化・自立型学習法（通称：マイプラ）を展開し、通信制と親和性の高いICTを推進することで、より多くの学びの利便性と創造性を高めている。

通信制課程の本校には、スポーツや芸能活動などの夢の実現と学業との両立を目指す生徒のほかにも、不登校や高校中退等を経験した生徒が多数在籍し卒業している。そのような多様な生徒たちが、それぞれの希望する進路を実現できるよう、生徒一人ひとりの「チャレンジ・再チャレンジ」を支援し、すべてを成長実感型とした、「生徒の成長度No.1」の学校を目指している。

その教育活動の一環として、本校で行なわれているスクーリングに関しては、令和6年度に延べ約7,000名の生徒たちが参加した。通常の面接指導等以外に高萩市民講師による体験学習活動での小さな成功体験を通じ「達成する喜び（達成感）」や「他者へ貢献する喜び（貢献実感）」は元より、先人が次代の人々の生活を良くするために行った工夫を体感させ、次代へ自分自身に何ができるのかを考えさせている。

この今までにない経験からの学びや気づきにより、ひと回りもふた回りも大きく成長（スクーリングを通じた自己成長実感度79.1%）し、その経験は生徒自身が将来への夢や目標を意識するきっかけとなり、今後の人生の大きな糧となっているものとする。生徒たちにとっては、本校が「母校」、高萩市は「第二のふるさと」であり、一生涯の高校生活の思い出として心に強く残っている。

本校は、創立20周年を迎え、11月には生徒主体でのオンライン参加併用型の文化祭「橙萩祭」を行い、生徒の文化芸術活動の発露の場、仲間とのあいだで共同作業に邁進し達成感を得ることで成長を実感する機会となっただけでなく、「他喜力」を発揮し、橙萩祭を通じて地域の皆様に日頃の感謝の気持ちを伝えることができた。

12月には創立から今日に至るまで、支援をいただいた方々に感謝の気持ちを伝える場として、

高萩市文化会館にて 20 周年記念式典を執り行った。式典では、高萩市長をはじめ、多くの来賓や地域の方々など、総勢 300 名を超える方々が出席し、20 年間の地域社会への貢献について評価をいただいたところである。

また、式の司会と国歌・校歌斉唱におけるピアノ伴奏、Ⅱ部の記念演舞、記念ロゴの制作を生徒が担当するなど、在校生も式典の成功に貢献した。

本校は、30 周年を見据えた次の 10 年に向け、これからも建学の想いでもある、常に「素直な心」で、「夢を意識し夢を持ち」、「達成実感・貢献実感」を持つ生徒（社会で活躍できる人）の輩出に寄与すると期待している。

本校は、『建学の想い』である「常に素直な心」「夢を意識し、夢を持つ」「達成実感・貢献実感」を深化させ、生徒一人ひとりに応じた自他肯定感を育む教育（1／1（いちぶんのいち）の教育）、また、「生徒の現在（いま）と将来の人生を左右する重責を前向きに担う」という使命を果たすべく、教職員・事務スタッフ全員で“社会で活躍できる人づくり”に全力で取り組んでいる。

2 学校の現況

(1)学校名：第一学院高等学校 高萩校 学校長名：川原井 勝雄

(2)課 程：通信制 本科（普通科）、専攻科（保育通信課程）

(3)職員数：合計 218 名（校長・教頭・教諭 166 名・養護教諭 1 名・講師 11 名・事務職員 38 名）
(令和 7 年 3 月 31 日現在)

(4)学習センター数と内訳：学習センター30 か所、通学生 153 名、通信生 6,647 名
(通信制内 本科生 6,489 名、専攻科生 158 名)
(令和 7 年 3 月 31 日現在)

(5)免許状の延所有状況：

国語	32 名	地歴	39 名	公民	37 名	社会	6 名	数学	19 名	理科	18 名
芸術	10 名	保体	20 名	保健	1 名	家庭	3 名	情報	6 名		
外語	25 名（英語 24 名・仏語 1 名）	工業	1 名	商業	6 名	養護	1 名				
延べ計	224 名										

(令和 7 年 3 月 31 日現在)

(6)生徒数：・本科（普通科） 6,489 名

1 年次 1,729 名（男 744 名、女 985 名）

2 年次 2,169 名（男 976 名、女 1,193 名）

3 年次 2,591 名（男 1,201 名、女 1,390 名）

・専攻科（保育通信課程） 158 名

(令和 7 年 3 月 31 日現在)

(7)スクーリング：

・本科（普通科） 参加生徒数 7,060 名（24 回実施）

・専攻科（保育通信課程） 参加生徒数 153 名（5 回実施）

(8)体験学習

参加生徒数 ： 延 6,231 名

講座数：延 293 講座
講師数：延 755 名

3 学校運営状況について

本校は、経営体制と学校運営の体制強化を目的に、経営側と学校側の意思疎通を図りながら運営している。また、「社会で活躍できる人づくりを実現できる最高の教育機関を目指す」というコーポレートビジョンを掲げ、「1／1（いちぶんのいち）の教育」の教育理念のもと、多様な教育ニーズに対応し、教育の質的向上に取り組んでいる。

生徒数は本科（総合学科・普通科）が 6,489 名（定員充足率 86.5%）、専攻科が 158 名（定員充足率 7.9%）と前年から本科は 6 名増加、専攻科は 13 名減少となっている。これまで顧客支持獲得及び経営努力により順調に業績確保をしてきているが、学校経営は少子化、競合学校の生徒獲得激化にあり、更なる教育の質と顧客満足の向上の 2 軸に取り組んでいくことになる。

株式会社立学校においては、学校法人立学校に比して、税制面・私学助成面において圧倒的な差異があり、学校経営の原資は、生徒・保護者の純粋な学費に因るところとなっている。

今後も、全国の学習センターとの連携強化を図り、教育理念「1／1（いちぶんのいち）の教育」のもと、共通の教育像・学校像・生徒像を掲げ、通信制高等学校としての指導と付加価値を与える学習センターでの指導、それぞれについて、カリキュラム等を明確にし、より安定した経営のためにも各教科の指導体制の充実を図ることが重要である。

4 学習指導について

学習形態としては、自学自習が主となっているが、多様なメディア（①教科書準拠動画を利用した WEB 授業、②放送〔NHK〕視聴報告）を利用した面接指導や本校のスクーリングにおいて直接授業を行っている。

スクーリングでは単なる一方向の学習指導の場となるだけでなく、生徒にとって主体的・対話的で深い学びの場となるよう創意工夫を凝らしており、その学びが生徒一人ひとりの一生の財産となり、それぞれが地元に戻ってから人生をより豊かにすることができるよう生徒の意欲喚起に努めている。

また、本校通学生には、月曜日を登校日としてきめ細かな指導にあたっている。

各教科の報告課題はレポートとして提出されているが、途中でレポート提出が滞る生徒もいる。そのため、学習センターの教員によるレポート作成支援が重要になってくる。特区のため制約される中でも、引き続き教育の質を担保できるようより細かな指導に努める必要がある。

さらに、生徒によって学力の差があるため、基礎・基本を押さえ個々に応じた課題を明確にするなど、教育の工夫の必要性があり、個別最適な学びにつながるよう引き続き丁寧な指導に努めていく必要がある。

試験については、単位の認定の他、その後の指導や生徒自身の学習の改善などに生かすため

に、個々の生徒の学習状況等を把握する上で重要な役割を担うものであり、各科目等の目標の実現に向けた学習状況を把握する観点からレポートや面接指導等の内容と十分関連付けて実施している。

5 体験学習・生徒指導について

本校スクーリングにおいては、地域参画の体験学習をキャリア教育の一環として力を入れており、「豊かな自然の中」で、「異年齢の地域住民」から生徒が指導を受けることから、さまざまな「気づき」・「実感」が生まれ、生徒の将来を前向きに描き、今を意欲的に取り組む動機付けへと繋げている。

様々な生産活動やものづくりの体験学習を通じて、それらが現在の私たちの生活や社会の変容に果たしてきた役割や意義について考察し、豊かな生活、社会の創造のため、人々が紡いできた工夫や知恵に気づき、今後の自分の生き方、在り方を考える指針を表現し、主体的に他者とかわり、よりよい人生を歩むための学びにプラス思考で向かえるようにしている。

年次を積み重ねることにより学びの蓄積・発展となるよう、農林業等にかかる体験活動を3分類（食料としてのものづくり〔農業生産・消費〕、生活を支えるものづくり〔実用品・工芸品〕、生活を豊かにするものづくり〔新たな商品価値〕）とし、生産・消費から新たな商品価値創造までの流れを知ることができるようにしている。

生徒の取り組みは個々に差はあるものの全体的には意欲が見られ態度も良好である。

当年度で開校20年目になり、以前に経験したスクーリング時の実体験を通して、達成実感・貢献実感・成功実感・失敗体験等の積み重ねにより、生徒一人ひとりが様々な「気づき」から、態度にも変化が現れてきている。また、生徒指導も組織的に機能を果たしてきている。今後も本校の目指す「社会で活躍できる人材の育成」実現に向かってさらに努力することを期待している。

体験学習で連携を共にするNPO法人「里山文化ネットワーク」においても、様々な工夫がなされ生徒の意欲付けに努力されている。体験学習の実施に際して、職業として長年従事してきた農林業等の分野で豊富な経験を持つ高齢者やボランティアの専門家が中心となり指導にあたっている。今後も継続的・安定的に活動できるよう科目の充実をはかり、講師の確保・養成に向けて連携を強化してほしい。

通学生は、茨城県北地区（高萩、北茨城、日立）在住の生徒が半数以上を占め、茨城県央地区や福島県浜通り地区（いわき市等）の県外からも通学してきている。

また、保護者に対して、「里山通信（家庭通信/学年通信）」を概ね毎月発行し、学校の目標や方針、教育相談等を知らせることにより、理解・協力を得ている。

7月には初のチャレンジとして、地元の日本舞踊の先生を講師に迎え本校通学生・スポーツコース生に対し、「たかはぎ音頭流し踊り」を体育の対面授業として実施した。三者【学校・地域・家庭】教育ネットワークの構築に努め、本校を教育・子育てに関する地域のハブステーションへの一歩として前進している。

また、昨年度以上に地域全体を学校と捉えてコミュニティ共育を推進し、ボランティアや地域イベントへ積極的に参画し、生徒の達成実感・貢献実感の醸成につなげている。

① 教育プロジェクト

「地域の魅力を映像にしよう!撮り旅」での常磐3市(茨城県高萩市・同北茨城市・福島県いわき市)の高校生による地域の魅力を発信するプロモーション動画制作に参画(9月)、
【撮り旅in高萩】わたしが愛したまち高萩の動画を本校生徒(1人)が制作、公開〔茨城新聞掲載〕

- ② 第72回たかはぎ駅伝競走大会出場(12月) 高校生の部:優勝〔茨城新聞掲載〕
- ③ 地域市道/海岸清掃ボランティア(5月) 参加生徒130人
- ④ 秋山幼稚園協働高戸小浜清掃ボランティア(6月) 参加生徒38人
- ⑤ 高萩海岸清掃ボランティア(7月) 参加生徒31人
- ⑥ 赤い羽根募金イラスト提供ボランティア(9月) 参加生徒105人
- ⑦ 高萩市中央公民館まつりボランティア(10月) 参加生徒6人
- ⑧ 高萩市高校生が教えるスマートフォンの使い方講座ボランティア(11月) 参加生徒7人
- ⑨ 秋山幼稚園園児サッカー指導ボランティア(2月) 参加生徒17人〔茨城新聞掲載〕

11月には、通学生が自ら企画した第17回文化祭「橙萩祭」を開催した。テーマ:「一瞬の時間を最高のトキに」には、生徒の「同じ時間(とき)・時空を共有する 連帯感を最高潮にして、高萩へ、そして生を受け今まで関わった方への“感謝”と“幸せ”をあふれるほど咲かせる文化祭としたい」という思いがあり、そのテーマを自ら体現できるよう取り組んでいた。

地域からの参加者(大部高萩市長、鈴木高萩市副市長、大内高萩市教育長、大足茨城県議会議員、浅野衆議院議員など)は、オンライン参加を含み307人(昨年度264人)であった。

高萩市君田地区で栽培した大根をNPO法人里山文化ネットワークの方と生徒が協働で前日に収穫し、当日販売も毎年の恒例となっており盛況を呈している。その他、ファーストリテイリング(ユニクロ)の「服のチカラプロジェクト」や高萩市社会福祉協議会の「使用済み切手収集プロジェクト」(初)と連動、高萩市立秋山幼稚園園児とのオープニングダンス(初)や近隣小中特別支援学校(北茨城特別支援学校・中郷中学校・中郷第二小学校)と協働、ARTS(生徒が制作した様々な芸術作品展示:本校の全国各地のキャンパスから合計93点の作品)エリアに三校合同作品展の展示(初)を実施した。地域連携が進展できたことを一つの要因として過去最高の売上金を橙萩祭実行委員会から高萩市へ寄付(¥158,600)することができた。限られた時間の中で、懸命に取り組んだことによって生まれた自信と達成感は、今後の人生において大きな財産になると同時に、更なる「他喜力」発揮につながっている。

また、昨今のソーシャル・ネットワーキング・サービスの多様化、インターネットの低年齢利用化は着実に進んでおり、情報モラル・リテラシー教育とあわせて、成人年齢引き下げによる自立・自律心の醸成の2つが重要であるため、更に推進していく必要がある。

(参考)

卒業生進路状況（令和 7 年 5 月 1 日 学校基本調査より）

卒業生 2,493 名

進学

・大学	808 名
・短大	35 名
・通信制大学	156 名
・専門学校	678 名
・専修・各種学校	31 名
・高等学校専攻科	3 名
・公共職業能力開発施設等	15 名

就職 353 名

その他 414 名（受験浪人生や在家庭者）

6 スポーツコース（サッカー部）について

本校においては、平成 19 年 4 月にスポーツコース（サッカー部）を創設しているが、創設の目的として、本校には不登校や引きこもり、高校中退・転校といった挫折を経験した生徒が多い中で、サッカー部の仲間が活躍することにより全国の在校生たちや本校を巣立った卒業生に元気と勇気を与え、母校に誇りを持ってもらいたいということが挙げられる。また、時間的制約の少ない通信制課程である点を有効に活用し、サッカーを通じて夢にのぞみたい若者のチャレンジの場の提供となっている。その趣旨で株式会社立高校として初めて高体連に加盟を認められ、全日制高校生と同じ大会に参加している。

本校サッカー部は、チームコンセプトに学校設置会社である株式会社ウィザスの「6 つの実践」（肯定的思考・信頼・素直な心・考え抜く・感謝・尽力）・「4 つの全力」（準備・頭・心・体の全力）を掲げている。また、本校の教育活動のベースである意欲喚起教育「プラスサイクル指導」をサッカー部にも取り入れている。「プラスサイクル指導」は、「楽しく意欲的に取り組む」、「自分のためだけではなく自分以外（普段支えてくれている人たち）を喜ばせるために頑張る」、「意識的にプラス思考を心がける」と脳の働きが活性化するという脳科学の研究成果を生徒指導に活用したもので、生徒自身が意欲喚起していく力を引き出すものである。

これを通じてサッカー部の生徒たちは、チームの目標を明確化し、「厳しい練習をワクワク楽しむにはどうしたら良いか？」「今のピンチをどうしたら乗り越えられる？」といったことを、プラス思考で前向き・意欲的に考えるようになってきている。

目標達成をイメージし、また、自分たちのためだけではなく、普段支えてくれている人たちに喜んでいただくために一致団結し、平成 22 年度第 89 回、平成 23 年度第 90 回全国高校サッカー選手権茨城県大会と 2 年連続で準優勝、平成 26 年度第 93 回全国高校サッカー選手権茨城県大会では初の優勝と全国大会出場を果たし、翌平成 27 年度第 94 回全国高校サッカー選手権茨城県大会では 2 年連続の全国大会まであと一步の準優勝を果たすことができた。

また、サッカー部では年間を通じて、試合期・トレーニング期など、サッカーのスケジュール

ルに合わせた生活を送っている。日中にトレーニングを行い、通信制の特色を活かしたフレキシブルな時間での学習時間の確保を行っている。また、地域でのボランティア活動を通じた人格形成を行うとともに併せてサッカーを極めるための知識など、アスリートとして必要な専門的なスキル・知識も学んでいる。

28名の部員が下宿生活（下宿以外は自宅通学）を送りながら、専属監督のもと専門のコーチ・スタッフ陣と選手たちが一丸となって練習を重ね、本校教職員の日常指導のサポートを通じて、創部18年目ながら着実に力を付けてきた。

令和6年度は、部員数49名（3年次13名・2年次17名・1年次19名）となり、高校クラブ活動としての土台作りに対し活気ある活動が実践できた。監督を含め専門のスタッフの充実化も図り、IFAリーグ1部で着実に力を取り戻し、一層の強化並びに強豪復活への活躍が期待される。

本校のシンボルであるサッカー部の活躍が高萩市民はもとより全国で学ぶ本校生徒、また全国の通信制高校生に大いなる元気と勇気を与えることを実現すべく、更に部活動外の日常生活においても人間力向上に日々精進していくことを願う。

■令和6年度における戦績

高円宮杯 JFA U-18 サッカーリーグ 2024（IFA リーグ 1 部）	第 7 位
令和 6 年度茨城県高校サッカー新人大会トーナメント	準決勝敗退（ベスト 4）
令和 6 年度関東高校サッカー大会茨城県大会トーナメント	準々決勝敗退（ベスト 8）
令和 6 年度全国高校総体サッカー競技茨城県大会トーナメント	準々決勝敗退（ベスト 8）
第 103 回全国高校サッカー選手権大会茨城県大会トーナメント	準々決勝敗退（ベスト 8）

7 10年後をイメージするキャリアサポート

本校は、生徒の社会での活躍を願い、高校入学から10年後の25歳を進路定着の目安と考えている。高校での3年間で見つけた夢や目標の実現に繋げるため、進路定着を意識した在学中の指導や卒業後の継続したキャリアサポートを行っている。

グループ内に新潟産業大学およびその通信制課程のネットの大学@managaraや専攻科（保育通信課程）を置き、その他、就労移行支援事業も行い、社会での自立を図っている。

8 「高萩市教育特区」における経済効果について

本校スクーリング時に体験学習を行う NPO 法人「里山文化ネットワーク」との連携や、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、感染防止に留意しながら縮小して本校独自に実施した「高萩駅前ロータリー清掃」「国道6号・国道461号・県道10号側道清掃」「高萩海岸清掃」でのボランティア活動や、「赤い羽根イラストボランティア」「心をつなぐ花壇づくり」「高萩市中央公民館まつり」「高萩市高校生が教えるスマートフォンの使い方講座」「健康フェスタ」等に積極的に参加

することで、地域活性化と地域振興に努めている。

経済効果については、市の税収、施設等の賃借料及び使用料、講師料、学校施設維持管理経費、教職員の日常生活費などで、約4億4百万円（一昨年度比7千9百万円増）となっている。

また、令和6年3月25日に高萩市とウィザスにて、「地域振興に関する協定」締結し、高萩市の地域活性化や住民サービスの向上、教育の充実に役立てていただくよう1億円の財政支援を行うこととなった。これは、第一学院高等学校の開校20周年を記念し、企業版ふるさと納税制度を活用し、毎年1千万円ずつ、10年かけて寄付を行うものである。